

vRealize Automation 8.0.1 リリース ノート

Updated on 09/08/2020

2020 年 6 月 30 日更新

vRealize Automation 8.0.1

- vRA Easy Installer (ISO) ビルド 15336196
- vRA 製品（アプライアンス）ビルド 15294185

各リリース ノートで、追加または更新された情報をご確認ください。

リリース ノートの概要

- [vRealize Automation 8.0.1 について](#)
- [新機能](#)
- [はじめに](#)
- [アップグレード](#)
- [既知の問題](#)

New : vRealize Automation 8.0.1 Patch 5

vRealize Automation 8.0.1 Patch 5 が利用可能になりました。さまざまな領域におけるバグの修正が含まれています。これは累積アップデートです。既存の vRealize Automation 8.0 のユーザーは、Patch 5 へのアップデートが必要です。

前提条件：vRealize Automation 8.0 を使用中のユーザーは、まず vRealize Automation 8.0.1 にアップデートしてから、8.0.1 の Patch 5 を適用してください。

vRealize Automation 8.0.1 Patch 5 のパッチをインストールする前に vRealize Suite Manager 8.0.1 Patch 1 をインストールすることをお勧めします。vRealize Suite Manager 8.0.1 Patch 1 のインストールの詳細については、「[vRealize Suite Manager 8.0.1 Patch 1](#)」を参照してください。

詳細とインストール方法については、[ナレッジベースの記事 KB76805](#) を参照してください。[ナレッジベースの記事 KB78235](#) を事前に適用することを検討してください。

バージョン 8.0.1 Patch 5 は、vRealize Automation 8.0.1 に対して VMware が提供を予定する最後のパッチです。機能のアップデートの継続や、問題の解決をするには、最新バージョン 8.x へのアップ

グレードをお勧めします。最新バージョンへのアップグレードプロセスは、パッチのインストールと同様の時間と手間で行えます。

vRealize Automation 8.0 および 8.0.1 の新規インストールが失敗する場合があります。

- vRealize Automation 8.0 および 8.0.1 の新規インストールが失敗する
- 8.0.1 へのアップグレードまたはホットフィックスのインストールが失敗する
- vRealize Automation 8.0.1 の再起動後に 404 エラー (page not found) が表示される

詳細な手順と回避策については[ナレッジベースの記事 KB78235](#)を参照してください。

vRealize Automation 8.0.1 について

vRealize Automation 8.0 は、オンプレミスのフォーム ファクタに vRealize Automation Cloud 機能を提供し、SaaS またはオンプレミスに vRealize Automation を使用できるようになりました。このリリースには、最新の vRA 8 のアーキテクチャと機能が導入されており、エンタープライズの俊敏性、効率性、ガバナンスを強化できます。

vRealize Automation 8.0.1 には次のような多くのメリットがあります。

- **Kubernetes** ベースのマイクロサービス アーキテクチャを使用する最新のプラットフォームには次のメリットがあります。
 - 高可用性 (HA) 構成でも非高可用性 (HA) 構成でもシンプルなインストール占有量
 - 最新のワークロードの課題に対応できるように拡張可能
- マルチクラウドインフラストラクチャ サーフェスのセットアップと使用が簡単
- クラウドの自動化を実現するための API ファースト アプローチ
- 宣言型 YAML 構文を使用した、**Infrastructure-as-Code** の提供
- ブループリントの反復型開発
- クラウドに依存しないブループリント
- オブジェクトの共有によるチーム間の共同作業
- アジャイル ガバナンスと統合したセルフサービス カタログ
- シンプルなポリシー
- SPBM ポリシーのネイティブ サポート
- vSphere でのデュアルスタック IP (IPv4/IPv6) ネットワークへの IPv6 ワークロードの展開
- CI/CD パイプラインとアプリケーションの自動リリース管理
- Kubernetes/コンテナの管理

- 新しいアクションベースの拡張性 (ABX) により、Node.js と Python を使用した軽量スクリプトの作成が可能
- すべてのブループリント、ワークフロー、アクション、およびパイプラインを管理する Git 統合
- 既存のデータセンター仮想マシンでのワークロードのオンボード

新機能

本リリースは、パフォーマンスとセキュリティの向上に重点を置いた次期リリースの **vRealize Automation** です。

ハイブリッドクラウド管理の導入、パブリッククラウドへのクラウド管理の拡張、DevOps によるアプリケーションの配信、Kubernetes ベースのワークロードの管理などの最新のアプローチは、新しいリリースでも引き続き採用されています。

- **vRealize Automation 7.5 または 7.6 からの移行の評価**
 - **vRealize Automation 7.5 または 7.6 から vRealize Automation 8.0 へのアップグレード** または移行の機能は、**vRealize Automation 8.0** では使用できません。
 - 移行元の環境と組み込みの **vRealize Orchestrator** インスタンスに移行の評価を実行して、**vRealize Automation 7.5 または 7.6** の移行元環境の移行準備を判定することのみが可能です。移行の評価では、移行の準備ができていないシステムオブジェクトと、依存関係についてのアラートが表示されます。「[システムオブジェクト](#)」を参照してください。
- **Git 統合**
 - 自己署名証明書を使用した **GIT** サーバが新たにサポートされます。
 - **GitLab Integration** または **GitHub Integration** を追加し、**GIT** サーバに自己署名証明書を指定すると、証明書情報を示したポップアップが表示されるようになりました。ユーザーは、その証明書情報を確認したうえで受け入れることができます。自己署名証明書の受け入れ後、ユーザーは、有効なトークンを使用して、その **GIT** エンドポイントの統合を作成し、リポジトリからブループリントまたは **ABX** スクリプトの同期を開始できるようになります。
- **ブループリントプロパティエディタ**
 - ブループリントエディタに、オブジェクトのプロパティを編集できる **GUI** が追加されました。この **GUI** は、キャンバス上にあるものとコードビュー内にあるものをリアルタイムで反映し、プロパティの追加や既存のプロパティの編集に使用できます。**GUI** に表示されるフィールドにはいずれも、関連する有用な **Signpost** のヘルプが含まれています。

- ネットワークとデプロイのための API の強化
- 拡張性 VA と ABX 回復性の機能強化
- vRO ベースのカatalog サービスで、入力パラメータとしてアレイ/番号がサポートされるようになりました。
- カスタム フォームの機能強化

製品内ユーザー サポート

VMware vRealize Automation 8.0.1 には、製品内ユーザー サポートが含まれています。

- 設定について調べるには、Signpost のヘルプを使用します。
- 機能または設定プロセスの詳細を調べるには、ヘルプ パネルを使用します。

vRealize Automation 移行評価オフライン キャプチャ ユーティリティ 1.0.0

vRealize Automation、vRealize Orchestrator、外部 vRealize Orchestrator の移行元環境からオフラインでデータを収集するには、データ キャプチャ ユーティリティを使用します。収集したデータ バンドルは、評価ワークフローにアップロードすることができます。

はじめに

サポート ドキュメントで製品について理解しておく必要があります。

- [vRealize Easy Installer を使用した vRealize Automation のインストール](#)
- [vRealize Automation でのユーザーの管理](#)
- [vRealize Automation 8 移行評価サービスの使用](#)

vRealize Automation をインストールしてユーザーを設定した後、含まれている各サービスについて、*スタート ガイド*と *使用と管理ガイド*を参照できます。*スタート ガイド*では、エンドツーエンドの事前検証について説明しています。*使用と管理ガイド*では、使用可能な機能の検証をサポートする詳細な情報を提供しています。[vRealize Automation 8.0 の製品ドキュメント](#)には、その他の情報も記載されています。

- [vRealize Automation Cloud Assembly スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Cloud Assembly の使用と管理](#)

- [vRealize Automation Code Stream スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Code Stream の使用と管理](#)

- [vRealize Automation Service Broker スタート ガイド](#)
- [vRealize Automation Service Broker の使用と管理](#)

vRealize Orchestrator 8.0 の機能と制限事項については、「[vRealize Orchestrator 8.0 リリース ノート](#)」を参照してください。

アップグレード

vRealize Suite Lifecycle Manager を使用した vRealize Automation 8.0 から 8.0.1 へのアップデートがサポートされています。

vRealize Suite Lifecycle Manager を使用した 8.0.1 へのアップグレードの詳細については、「[Upgrade vRealize Automation 8.0 with vRealize Suite Lifecycle Manager](#)」を参照してください。

vRealize Automation 8.0.1 にアップグレードする前に、ルートパーティションとデータパーティションのディスク容量に、それぞれ 20 GB と 48 GB の空きディスク容量があることを確認してください。HA セットアップの場合は、すべての vRealize Automation 仮想アプライアンス ノードで仮想マシンのディスクを拡張する必要があります。

- 上記の要件を満たすように vRealize Automation のルートパーティションディスクを増やすには、vCenter Server で仮想アプライアンスをパワーオフせずに、vRealize Automation 仮想マシンの「ハードディスク 1」 (/dev/sda4) のサイズを 50 GB に増やします。次に、vRealize Automation 仮想アプライアンスのコマンドシェルから「`vracli disk-mgr resize`」コマンドを実行します。ディスクのサイズ変更は数分以内に反映されます。
- 上記の要件を満たすように vRealize Automation のデータパーティションディスクを増やすには、vCenter Server で仮想アプライアンスをパワーオフせずに、vRealize Automation 仮想マシンの「ハードディスク 2」 (/dev/mapper/data_vg-data) のサイズを 148 GB に増やします。次に、vRealize Automation 仮想アプライアンスのコマンドシェルから「`vracli disk-mgr resize`」コマンドを実行します。ディスクのサイズ変更は数分以内に反映されます。

注：仮想マシン スナップショットが存在する場合、vRealize Automation 仮想マシンのディスクを拡張することはできません。

解決した問題

- API GET /iaas/api/fabric-images の結果から「description」プロパティが得られない

API /iaas/api/fabric-images の GET は、利用可能なファブリック イメージの「description」プロパティ（vCenter Server では「Notes」フィールドと呼ばれます）を取得する目的で定義されます。正しく動作するものの、description フィールドが返されません。

回避策：なし

- コンピューティング インスタンスに接続されたボリュームと追加された count プロパティを使用してブループリントを展開すると、複数のディスクが作成され、一部のディスクが切断される

このようなブループリントを展開すると、プロビジョニング後に、作成された展開

（count：2 など）でいずれかのディスクが接続されず、常に切断されたままになります。

「attachedDisks」プロパティの値に複数のディスクが設定されている場合は、最新の構文（`map_to_object(resource.disk[*].id)`）のみを許可するのが理想です。カタログ ユーザー インターフェイスではコスト見積もりもサポートされず、このようなブループリントがカタログ アイテムとして公開されるとエラーが発生します。

回避策：必要なディスク数の count プロパティを追加し、ブループリント キャンバスでディスクとマシン間のリンクのみを作成します。この方法により、yaml は常に attachedDisks プロパティの最新の構文を取得します。この方法を使用しない場合、ディスクがコンピューティング インスタンスに接続されたら、count プロパティを使用して複数のボリュームを追加する際に、新しい構文に手動で更新する必要があります。ブループリントで手動で更新する場合の正しい構文は、次のとおりです。attachedDisks:

```
'${map_by(resource.Cloud_Volume_XYZ.id, id => {"source":id})}'
```

- プロキシの背後でインターネットにアクセスすると ABX が動作しないことがある

vRealize Automation 8.0.1 は、すべての使用事例で、インターネット アクセスに必須要件がある制限されたアプリケーションの HTTP プロキシの背後でのリモート アクセスをサポートしています。これには、ABX ベースの拡張と AWS クラウド アカウントが含まれます。

- 特定のドメイン名（特にパブリック サフィックスを使用していないドメイン名）にワイルドカード証明書を設定できない

vRealize Automation 8.0 では、パブリック サフィックス リスト ([<https://publicsuffix.org/>]) の内容と一致する DNS 名のワイルドカード証明書のみを設定できます。有効なワイルドカード証明書の例として、「*.myorg.com」のような DNS 名のワイルドカード証明書を使用できます。「com」がパブリック サフィックス リストに含まれているため、この名前はサポートされます。無効なワイルドカード証明書の例として、「*.myorg.local」のような DNS 名のワイルドカード証明書を使用することはできません。「local」はパブリック サフィックス リストに記載されていないため、この名前はサポートされません。

- 仮想アプライアンスをスナップショットに戻すと、vRA 8.0 クラスタの起動に失敗する

LCM 内の 3 ノードの vRealize Automation 8 クラスタのスナップショットは現在使用できません。

- プライマリ データベース ノードを停止すると、EBS トピックが登録されずにプロビジョニングが失敗する

vRealize Automation 8 の高可用性 (HA) 環境で、プライマリ データベース ノードを削除した後にプロビジョニングを行うと、「EBS トピックが登録されていないため、イベントの発行に失敗しました (Failed to publish event as EBS topics are not registered)」というエラー メッセージが表示されて失敗します。

- 移行評価の「はじめに」ページの『移行ガイド』へのリンクが無効

移行評価ユーザー インターフェイスの移行ガイドへのリンクは正しくないため、無効です。

- テーブルの最後の行にあるコンテンツ ソースのエラー メッセージを確認できない

ユーザー インターフェイスの制約により、テーブルの最後の行にある内容に関するエラーメッセージをユーザーが確認できませんでした。

- **Active Directory** ポリシー アカウントを有効または無効にするオプションを導入

無効にすると、関連付けられたプロジェクトに **Active Directory** のポリシーが適用されていても、OU にコンピュータ オブジェクトは作成されません。この機能が追加された主な理由は、健全でない ABX オンプレミス統合が存在すると、コンピュータ オブジェクトの作成時のプロビジョニング中に、エラーが発生する場合があります。このような場合、ユーザーは **Active Directory** アカウントを無効にすることで、プロビジョニングを進めることができます。

- ユーザーの環境でインターネットにアクセスできなくても、**Active Directory** アクションに使用されるパッケージアクションの依存関係が正常に動作する

ユーザーの環境でインターネットにアクセスできなくても、**Active Directory** アクションに使用されるパッケージアクションの依存関係が正常に動作する

- **Active Directory** ポリシーが有効になっていても **Cloud Assembly** ユーザー権限を持つユーザーがプロビジョニングできる

Cloud Assembly ユーザーはアクションの実行を開始できますが、アクションの実行ステータスを取得できないため、**Active Directory** ポリシーが有効になっていると、プロビジョニングフローで問題が発生していました。

- プロビジョニング中にマシンを **Active Directory** のドメインに自動的に参加させることができる属性をコンピュータ オブジェクトに追加

以前は、**Active Directory** に作成されたコンピュータ オブジェクトに `samAccountName` 属性が設定されなかったため、マシンをドメインに参加させる際に問題が発生することがありました。

既知の問題

このリリースには、次の既知の問題があります。

- **vRO** が、配列型を「**type.isMultiple**」が **true** のフィールドではなく、1つの列のみの複合型として表す

配列入力とカスタマイズしたフォームを含むワークフローを追加する場合は、データグリッドの [値] タブで列の ID を変更しないでください。

回避策：_column-0_ というデフォルト値を使用します。一方、データグリッドに値を追加するとユーザー インターフェイスに表示される列のラベルは変更できます。

- 複数のディスクを使用したコスト見積もりのドキュメントの制限/回避策（ブループリントで **count** プロパティを使用している場合）

現在、vRA 8.0 では、ブループリントのユーザー インターフェイスが、接続されたディスクの新しい構文を yaml 形式で生成しないため、count プロパティが使用されているディスクの Day 0 プロビジョニングが中断されます。その結果、ディスクのコスト見積もりの必須プロパティ (vcUuid) のいずれかが null になり、カタログアイテムのコスト見積もりができなくなります。

回避策：ディスクに count プロパティを使用する場合は、yaml でブループリントの構文を以下のように手動で更新します。

```
attachedDisks: '${map_by(resource.Cloud_Volume_1.id, id =>
{
  "source":id
})}'
```

- アクセスが **Cloud.vmware.com** にリダイレクトされる

組織内のアクセス権があるログインユーザーに、「アクセス権がありません」というエラー画面が表示されます。このエラーは高可用性 (HA) 構成でのみ発生します。

回避策：ブラウザのキャッシュを消去します。

- タイプ「**properties**」からの入力を使用する **vRO** ワークフローをトリガできない

タイプ「properties」からの入力を使用する vRealize Orchestrator ワークフローが catalogSteps で公開され、vRealize Automation の catalogResult からトリガされると、トリガの実行は失敗します。

回避策：なし

- カタログから特定の **vRealize Orchestrator** ワークフローを実行するときに、**vRealize Automation** が制限される

現在サポートされているワークフローの入力タイプおよび出力タイプは、文字列、ブール値、日付、数値、SecureString、配列/文字列、配列/数値、配列/日付、リファレンス型です。

回避策：サポートされているタイプの入力/出力パラメータを含む vRealize Orchestrator ワークフローを使用します。

- **ライセンスの再構成がサポートされない**

Enterprise ライセンスを使用して vRealize Automation を構成した後は、Advanced ライセンスが使用されるようにシステムを再構成することはできません。

回避策：なし

- **vRealize Automation 8 では Internet Explorer 11 がサポートされない**

Internet Explorer 11 は vRealize Automation 8 で使用できません。

回避策：Internet Explorer 11 以外のブラウザを使用します。

- **vCenter Server マシンのコンソール ウィンドウからユーザーがタイムゾーンを設定したときに未定義の動作になる**

vCenter Server マシンのコンソール ウィンドウからタイムゾーンを設定すると未定義の動作が発生します。

回避策：vCenter Server マシンのコンソールからタイムゾーンを変更することは避けてください。

- **ディスクがパーシステントとしてマークされている展開をユーザーが削除すると、そのディスクも削除される**

ディスクがパーシステントとしてマークされている場合、接続先の仮想マシンが削除されたとしても、ディスクは維持する必要があります。しかし、ユーザーが展開全体を削除すると、パーシステントディスクが、仮想マシンやその他のリソースとともに削除されます。

回避策：なし

- **展開にリソースが不足しているときに、ユーザーがプランの生成のブループリントを適用することによってその展開を更新しようとする、「展開で別の要求がすでに進行中です」というエラー メッセージが表示されることがある**

さらに、展開履歴のタイムラインに別途「Day 2 アクション - 削除」が表示されます。また、ユーザーが API を介して展開を更新すると、「展開で別の要求が進行中です」と表示されます。

回避策：展開の更新を再試行します。

- **vRealize Automation 8 からユーザー ID を使用して E メールが送信される**

一部のユーザーが、自分のユーザー ID に関連付けられているメールアドレスとは別のメールアドレスを使用している場合があります。その結果、vRealize Automation 8 からの E メールが見つからなかったり紛失したりすることがあります。

回避策：なし

- **[通知] > [メール サーバ] 画面に誤った情報が入力されると、画面が空白になる**

入力された情報を vRealize Automation クラウドが検証すると、画面が空白になります。

回避策：検証プロセスが完了すると、画面が再ロードされて、操作が成功したかどうかを示すユーザー入力情報が表示されます。

- **OVF のプロビジョニングで、`$$$-ovf-backing` という名前の一時的な仮想マシンが作成される**

`$$$-ovf-backing` 仮想マシンは、ストレージの制約を適用しておらず、利用可能なデータストアにランダムに作成されます。他のデータストアに容量が不足しているか、権限に制限がある場合、`$$$-ovf-backing` 仮想マシンの作成に失敗します。

この問題は、ストレージポリシーで SDRS データストア クラスタが選択されている場合にのみ発生します。

回避策：ストレージポリシーで SDRS データストア クラスタを選択しないでください。

- **異なるネットワーク プロファイルの vSphere と NSX ネットワークの両方を使用して仮想マシンをデプロイすることができない**

異なるネットワーク プロファイルから仮想マシンをデプロイすると、次のエラーが表示されます。

「割り当てフィルタ エラー: コンピューティング「Cloud_vSphere_Machine_1」とその関連付けられたネットワーク リソースに共通の配置がリージョン

「/provisioning/resources/provisioning-regions/82caf58d876e46755997f33352ec8」に見つ

かりません。理由: ネットワーク フィルタ: ホストは、ブループリントおよび選択されたネットワーク プロファイル「net1」のネットワークに基づくネットワーク構成に準拠しません。元のタスク エラー: 割り当てフィルタ エラー: コンピューティング

「Cloud_vSphere_Machine_1」とその関連付けられたネットワーク リソースに共通の配置がリージョン「/provisioning/resources/provisioning-regions/82caf58d876e46755997f33352ec8」に見つかりません。理由: ネットワーク フィルタ: ホストは、ブループリントおよび選択されたネットワーク プロファイル「net1」のネットワークに基づくネットワーク構成に準拠しません」

このエラーは、同じブループリントで2つの異なるネットワーク プロファイルのネットワーク（vSphere ネットワークのみのこともあれば、vSphere と NSX の両方のネットワークのこともあります）が使用されているときにのみ発生します。

回避策：同じネットワーク プロファイルのネットワークを使用します。

- **PowerShell スクリプトタスクが実行中の状態であり、想定された時間内に完了しない**

この動作は、ユーザー スクリプトを実行する PowerShell プロセスが Windows システム プロセス WmiPrvSE によって保持されているために発生します。

回避策：CodeStream 経由で WinRM に接続するために使用されたユーザー名にアクティブ セッションがない場合は、システムにログインしてアクティブ セッションを維持してください。完全にログアウトするのではなく、画面をロックします。

- **エンドポイントにフォルダ パスが構成されている場合、使用可能なジョブが Jenkins タスクによって列挙されない**

エンドポイントにフォルダ パスが構成されている場合、使用可能なジョブが Jenkins タスクによって列挙されない

回避策：Jenkins エンドポイントを編集し、フォルダ パスを「/job/FOLDER」から「/FOLDER」に変更します。

- **すべての変数を解決できる場合を除き、通知に含まれるドル式が解決されない**

実行時に値を使用できないドル式が通知の構成に1つでも含まれる場合、送信された通知に含まれる式がすべて未解決となります。Results Text、results JSON などの短縮変数は解決されません。

回避策：使用できない可能性のある式を特定し、通知の構成から削除します。短縮変数を記述的な変数に置き換えてください。

- ワークスペースとの組み合わせで使用される **PULL 要求を持つ GIT Webhook** がソースコードの自動クローン作成に失敗する

ワークスペースでパイプラインに対して PULL 要求を使用するように GIT Webhook が構成されている場合、入力プロパティ (GIT_REPO_HTTP_URL) として指定されたクローン URL が欠落しているために `git clone` ステップに失敗します。

回避策：CI タスクをパイプラインに追加し、明示的な `git clone` コマンドを使用してソースをプルしてから、ソースで動作する他のタスク（ビルド/テストなど）を実行してください。

- 症状：保存した **NSX-V** または **NSX-T** クラウドアカウントおよび **vSphere** を、保存後に関連付けることができない

vSphere クラウドアカウントを作成し、[NSX エンドポイント] フィールド（ドロップダウン）を未選択の状態にしてから、[vSphere エンドポイント]（ドロップダウン）を選択せずに、NSX-T または NSX-V クラウドアカウントを作成すると、それらのクラウドアカウントを編集してから選択操作を行うときに、[保存] ボタンが有効になりません。

vSphere クラウドアカウントを作成します。対応する NSX Cloud アカウントを作成し、vSphere エンドポイントの選択を行ってから、クラウドアカウントを保存してください。

- 移行評価サービスが繰り返し再起動する

移行評価サービスが繰り返し再起動します。

回避策：[ナレッジベースの記事 KB51501](#) を参照してください。

- **NEW** : REST API で、「ユーザーにはプロジェクトがありません」というメッセージが表示されて単一要素認証が失敗する

単一要素認証は vRealize Automation 8.0 でサポートされていましたが、vRealize Automation 8.0.1 ではサポートされていません。

回避策：『vRealize Automation API プログラミング ガイド』は、この変更を反映するように更新されています。『[Get Your Access Token for the vRealize Automation API](#)』に記載されているように二要素認証を使用してください。

- **NEW :** ロードバランサのリストを名前でフィルタリングすると、vRA で展開した同一の NSX ロードバランサが、1 つは「展開済み」、もう 1 つは「検出済み」という異なる名前で 2 つ表示される

vRA で NSX ロードバランサを展開すると、ロードバランサは、vRA が内部データベースで使用しているものとは異なる ID および名前を使用して NSX に作成されます。結果として、vRA は最初に作成されたロードバランサレコードを更新せず、関連付けられた NSX Cloud アカウントをデータ収集する際には重複した新しいロードバランサレコードを作成してから更新を実行します。これにより、ロードバランサがリストされる画面では、ロードバランサが重複しているように表示されます。

回避策：vRA で展開した NSX ロードバランサをネットワークプロファイルに追加する際に、「検出済み」ではなく、「展開済み」のロードバランサを選択します。